

## 第2章 辞書におけるオノマトペ

第2章では、擬音語・擬態語辞典や一般の国語辞典、外国人のための日本語学習辞典にどのようなオノマトペが取り上げられているか、またそれらはどのように記述されているか、見てみることにする。学習者が教科書や教材、または日常の言語生活の中でオノマトペに出会い、その意味や用法を知りたいと思った時、あるいは教師が学習者にオノマトペの意味や用法を説明したり、学習者の質問に答えたりしようと思った時、最も手近な方法は手元にある辞書で確認することであろう。辞書はそのような意味で、オノマトペ学習や指導の環境に欠かせないものの一つであると考えられる。

ここでは、始めに2.1節で、擬音語・擬態語辞典4種と一般の国語辞典1種、日本語学習辞典2種を取り上げ、その概要や記述方法、見出し語として取り上げられている語の特徴等を紹介し、さらにそれらの辞書において、見出し語として採録されているオノマトペを調査した結果を報告する。次に、2.2節で、国語辞典と日本語学習辞典におけるオノマトペの意味記述と用例の挙げ方について、それらが学習者にとって理解しやすいものとなっているか、そこにどのような問題が存在するかを見ていくことにする。また特に、学習や指導が難しいと思われる類義関係にあるオノマトペがどのように記述されているかという点もあわせて考察する。2.3節では、擬音語・擬態語辞典におけるオノマトペについて、多義語の意味・用法の記述という観点から考察する。

ここでの調査と考察は、本論文の目指すところである日本語教育のための基本オノマトペのリソース化、すなわち基本的なオノマトペの意味・用法を、日本語学習者と教師のためのリソースとして記述する際の参照とする。

## 2. 1 擬音語・擬態語辞典、国語辞典、学習辞典の見出し語に採録されているオノマトペ

第1章で考察したように、どの語をオノマトペと認定するかは難しい問題であり、数種類の辞書を比べてみても、見出し語として採録している語にはかなりの相違がある。ここではまず、擬音語・擬態語辞典の中から代表的であると思われる4種の辞書を取り上げ、それぞれにどのような語が見出し語として採録されているかを調査する。次に、一般の国語辞典1種と、外国人のための日本語学習辞典2種の見出し語の中から、筆者が本論文においてオノマトペと認定する語がどの程度見出し語として含まれているかを調査し、報告する。

始めに、2. 1. 1で、調査の対象とした計7種の辞書の概要と、それぞれを調査対象として選定した理由を述べる。次に2. 1. 2で、7種の辞書に見出し語として採録されたオノマトペを語頭音別に集計し、一覧にして示す。また、それら7種の辞書に重複して採録されたオノマトペについて調査した結果もあわせて報告する。

### 2. 1. 1 調査の対象とした辞書

#### (1) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』山口仲美編著(2003)講談社

国語学者として、現代語に限らず、擬音語・擬態語の歴史的な変遷の研究と著作も多く著している著者が、主に新聞・雑誌・小説から採集した用例に併せて、コミック・挿絵、コラム等も充実させ、読んで楽しめる辞書となるよう編纂している。見出し語の総数は、約1,400語であるが、他の辞書に比べて近代文学や古典文学からの引用も多く見られる。これは、著者がこれまで擬音語・擬態語の歴史的変遷を中心に研究してきた成果を反映した結果であり、他の擬音語・擬態語辞典にない特色をもっていると考えられる。また擬音語・擬態語辞典としては出版年度が最も新しいものであることも、調査対象とした理由である。

#### (2) 『現代擬音語擬態語用法辞典』飛田良文・浅田秀子(2002)東京堂出版

『現代形容詞用法辞典』(1991)、『現代副詞用法辞典』(1994)を上梓した著者が、現代日本語の「副詞」の中でも、おもに状態を説明する擬音語・擬態語について、「擬音語・擬

態語とは何かを厳密に定義したうえで、これを分析する方法を開発し、修飾語研究・日本文化研究の立場から詳細に記述した辞典」である。見出し語の総数は約 1,060 語、同族語・関連語を含めると、総語数は約 2,000 である。

意味記述の方法は帰納的で、数多くの「理解用例」<sup>1</sup>から「その用例の示す状況と当該語の意味、話し手の心理」を一例一例分析し、記述している点が特徴的である。用例は「文芸作品からのそのままの採録は意識的に避け、状況を借用して翻案」している。一方、「ことわざ・標語・CM・民謡からは積極的に採録」している。これは、「不特定多数の日本人によって共有された状況の元に理解・使用され、日本人共通の文化を最も典型的に内蔵しているから」という著者の考え方に基づいている。

上述した通り、著者はすでに形容詞、副詞について同様に詳細な意味記述と豊富な用例を記した辞書を著しており、副詞の中で特に擬音語・擬態語に着目し、その背景にある日本文化・事情的な側面に焦点をあてている点、また(2)の辞書とは対照的に、文芸作品からの引用ではなく、日常的な場面における使用例を多く提示している点が、本論文における意味・用例の記述の参考となると考え、調査の対象とした。

(3) 『*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*』 Kakehi Hisao, Lawrence Schorup and Ikuhiro Tamori (1996) Trends in Linguistics. Documentation 12, Mouton de Gruyter

笥壽雄、ローレンス・スコウラップ、田守育啓は、いずれも現代におけるオノマトペ研究の第一人者であり、本論文第1章において先行研究として参照・引用した部分の基幹をなす研究書を多く著している。総見出し語数は約 1,600、約 850 点に及ぶ現代の文学作品からなる約 3,700 例の引用と、著者の作例による豊富な用例を掲げている。

特徴的な点は、オノマトペをその表す意味から〈擬音=M〉と〈擬態=S〉に大きく分け、その中でさらに複数の意味を持つものは、それぞれM1, M2, M3, S1, S2のように分けて記述していることである。また、比喩的な用法については〈Fig〉<sup>2</sup>として区別している。

この辞書を調査対象資料とした理由は、まず3人の著者がいずれもオノマトペ研究の第

---

<sup>1</sup> 言葉が出力されてくる前提となる状況が文章中に明示されている用例。これに対して、たとえ実例であっても、言葉のみからはもとの状況を再現できず、途中のブラックボックスたる人間の心理を特定することができない用例を、筆者は「表現用例」と呼んでいる。

<sup>2</sup> 'figurative' の略である。

一人者であること、またこの辞書が、現存する擬音語・擬態語辞典の中で最多のデータを擁するものであることが挙げられる。

(4) 『正しい意味と用法がすぐわかる 擬音語擬態語使い方辞典』(1993) 阿刀田稔子・星野和子

長年日本語教育や日本語教育実習に携わってきた著者が、「擬態語がまさに日本人の感性の所産であることに加えて、事態を把握する姿勢や、機能に見られる多様な変容などから日本語の発想の本質を端的に示している言語現象である」ことに注目し、擬態語の収集と整理、および今後の研究の資料の一端に提供する意味でまとめた辞書である。

見出し語として収録されているのは、「日常生活の中でごく自然に使われている」約730語であるが、それぞれの見出し語に【同類語】が挙げられているため、収録語総数は約1,700語となっている。意味が複数ある語については、それぞれの意味ごとに最低でも2例、多いときは5例から6例の例文を載せ、様々な場面での使い方がわかるように工夫されている。また、意味記述の下には、【用法】として[音][態]<sup>3</sup>という表示があり、その語の使われる対象となる事物、共起する述語が記されているのも、教師ならびに学習者にとって貴重な情報となるであろう。

副題の「正しい意味と用法がすぐわかる」からもわかるように、複数の意味を持つ語もその意味の違いがわかりやすく整理されており、用例も実際の使用に供するよう身近なものが豊富に用意されている点で、日本語教育において特に有用であると考え、資料として選定した。

(5) 『学研 現代新国語辞典 改訂第三版』金田一春彦編(2002) 学習研究社

「現代語を中心に約6万7千語を収録し、高校生以上一般社会人までの使用に供するために編纂された」辞書。初版の「序」には、「用法を細かく分けて例を多くあげた」ことで、「最近盛んになった外国人への日本語の教育にも役に立つことと思う」と記されている。このことから、国語辞典とは言え、日本語教育の場で使用される可能性があると考え、調査対象資料とした。

オノマトペについては、他の一般の国語辞典同様、品詞として、〈擬音語・擬態語〉のような表示はされておらず、その用法に応じて〈副詞〉〈自・サ〉〈名〉〈形動〉として分類さ

<sup>3</sup> それぞれ「擬音語」「擬態語」のことである。

れている。調査の結果、見出し語として採録されているオノマトペは、724語であった。

(6) 『外国人のための 基本語用例辞典 (第三版)』(1990) 文化庁

『外国人のための基本語用例辞典』は、「日本語の中で特に基本的であると思われる語を中心として解説し、適切な用例を付して、外国人の日本語学習の効果を高めるのに役立つこと」、かねて「教師が学習者を指導するのに十分利用できること」をねらって編集された辞書である。対象とする学習者は、日本語を500時間内外学習した外国人学習者、およびそれ以上の日本語の学力のある学習者とされている。

まえがきの「用例辞典の構成及びその使用法」も、外国人学習者向けに漢字には読み仮名をつけ、平易な語と文で説明がなされている。特に、見出し語の「意味・用法の説明」については、「できるだけやさしくて、分かりやすいことばに言いかえて説明してあり」、また「ほかのことばに言いかえただけでは、その語の意味がじゅうぶんに表せなかったり、特に必要な文法的なことについての説明をしたりするとき」は、「「／／」に入れて書いて」ある。さらに、「意味・用法の説明をするのに、まだ理解できないと思われるむずかしいことばを用いなければならなかったときは、そのことばのあとに「(= )」の形で、そのことばの意味が説明してある」というように、学習者に対する最大限の配慮をして編纂されていると言える。

本論文においても、中級レベル程度の学習者を対象に、基本的なオノマトペを選定すること、またそれらの意味・用法をできるだけ易しい言葉で記述することを目指していることから、この辞書における見出し語の選定とその記述方法が参考になると考え、資料として採用した。

オノマトペは、巻末資料の「擬声語・擬態語について」に189語が、また本文の見出し語中には108語が取り上げられている。<sup>4</sup> その中には、オノマトペ度が低く従来一般の副詞とされてきた「きちんと」や「ゆっくり」はもちろんであるが、擬音語である「じゃぶじゃぶ」「ぱちぱち」や、擬態語の中でもオノマトペ度が高い「のっそり」「ぎらぎら」等も含まれる。

(7) 『基礎日本語学習辞典 第二版』(2004) 国際交流基金

---

<sup>4</sup> 『外国人のための基本語用例辞典』に取り上げられたオノマトペについては、第5章2節で報告する。

「はじめに」のところに、「この辞典は、日本語を学習する外国人が、比較的初期の段階において使用することを目的として編集されたもの」とあるように、見出し語として採録されている2,981語は、「各日本語教育機関などにおいて初期の段階で多く取り扱われる語が中心になって」いる。またそれらは、「日本語の教材や語い調査、辞書などを参考にして、日本語教育に関係している方々の合意によって決め」とあることから、中級前期までの学習者に向けてどのような語をどのように提示しているかという資料となると考え、調査の対象とした。

見出し語は、ひらがな表記と振り仮名付の漢字かな混じり表記の両方で示されている。また、用例もすべて振り仮名を付け、ローマ字表記も併記されている点、初級学習者への配慮が感じられる。さらに、右側のページには、見出し語のローマ字表記と英語訳がつけられている。採録されているオノマトペは、以下の15語である。

がっかり	きちんと	さっと	さっぱり	しっかり
じっと	すっきり	そっくり	そっと	どンドン
ちゃんと	はっきり	びっくり	ふと	ゆっくり

さて、全体の語数が3,000語以下ということもあることを考えても、この15語というのは非常に少ない。見出し語総数が4,500語の『基本語用例辞典』では、本文だけで108語、巻末資料も加えると219語が紹介されているのと比べても、少なすぎるように思われる。さらに、先にも述べたように、これらの語は、従来一般の副詞として提示されていたようなものばかりである。従って、いわゆる典型的なオノマトペであり、初級の教科書にも見られるような「どきどき」「にこにこ」「ごろごろ」のような語はまったく扱われていないということになる。

## 2. 1. 2 7種の辞書に見出し語として採録されたオノマトペ

以上7種の辞書に見出し語として採録されたオノマトペを、語頭音別に集計したのが、【表1】である。<sup>5</sup> 各辞書の名称は、それぞれ著者名または書名による略称である。

<sup>5</sup> ここで集計した語数は、数え方の関係でそれぞれの辞書に記載されている見出し語総数と若干異なっている場合がある。また、濁音・半濁音が語頭音であるものは、清音と同じ列に集計している。(例:「びくびく」「びくびく」は「ひくひく」と同様「ひ」の列に含む。)

【表1】 「辞書の見出し語として採録されたオノマトペ」

語頭音	異なり語 総数	山口	浅田	Kakehi	阿刀田	学研 新国語	基本語 用例	基礎 日本語
あ	18	8	7	14	7	8	1	0
い	7	5	5	5	4	6	0	0
う	39	27	22	34	19	19	1	0
え	7	5	1	7	2	1	0	0
お	14	11	7	13	8	8	0	0
か	145	104	75	117	51	37	7	1
き	92	71	39	78	42	35	5	1
く	96	80	47	59	42	38	8	0
け	24	15	11	18	11	8	0	0
こ	110	82	55	83	38	41	8	0
さ	45	38	28	37	16	13	5	2
し	113	86	66	89	48	43	5	2
す	88	79	61	84	44	44	9	1
せ	5	3	4	4	3	4	1	0
そ	25	14	12	20	11	12	5	2
た	31	18	18	25	12	11	0	0
ち	86	68	55	79	34	40	4	1
つ	24	18	14	20	9	14	0	0
て	23	14	15	15	9	12	0	0
と	97	66	54	81	43	32	5	1
な	3	2	3	2	1	2	0	0
に	24	21	15	23	10	11	2	0
ぬ	15	10	7	10	7	8	0	0
ね	6	5	5	5	3	4	0	0
の	23	19	14	19	11	14	2	0

語頭音	異なり語 総数	山口	浅田	Kakehi	阿刀田	学研	基本語 用例	基礎 日本語
は	132	80	78	108	43	31	8	1
ひ	171	123	79	139	45	46	9	1
ふ	103	69	54	95	37	34	9	1
へ	69	42	34	59	23	23	0	0
ほ	163	103	82	132	42	52	5	0
ま	8	5	7	8	3	8	1	0
み	6	4	3	4	2	3	0	0
む	23	20	19	18	14	15	0	0
め	11	10	10	10	8	9	1	0
も	25	19	19	19	11	15	1	0
や	6	5	4	2	2	4	0	0
ゆ	12	10	7	11	4	7	3	1
よ	8	6	7	5	5	5	1	0
ら	2	0	2	0	0	0	0	0
り	4	2	2	3	1	0	1	0
る	2	1	2	1	0	1	0	0
れ	1	1	1	1	1	0	0	0
ろ	0	0	0	0	0	0	0	0
わ	20	12	7	15	9	8	1	0
を	0	0	0	0	0	0	0	0
ん	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1964	1380	1056	1571	734	724	108	15

【表1】から、現代語の擬音語・擬態語辞典に採録されているオノマトペの異なり語総数は、約2,000語弱であることがわかる。擬音語・擬態語辞典のうち、**Kakehi**に次いで多くのオノマトペを見出し語として採録しているのは山口の辞書である。また、オノマトペの語頭音として、最も多く見られたのが「ひ」で、「び」「ぴ」と併せて171語が、次に多かったのが「ほ」「ぼ」「ぽ」をあわせた163語であった。「は行」の音は、「へ」「ぺ」「べ」が69語であったのを除けばすべて3桁の出現数があり、「は行」全部では638語と、オノマトペ全体の33%も占めていて、日本語オノマトペには「は行」の語が圧倒的に多いということがわかる。次に多いのが「か行」の467語で、全体の24%を占める。つまり、日本語のオノマトペは、「は行」と「か行」を語頭音に持つ語だけで、全体の半数以上になるのである。「か行」に続いて多いのが、「さ行」の289語で、「た行」の279語がこれに続く。上位4つの「は行」「か行」「さ行」「た行」を合わせると1673語となり、今回調査した7種の辞書に採録された異なり語総数の85%が、この4つの行の音を語頭音に持っているということになる。

一方、語頭音として最も少ないのは、「ら行」で9語しかない。また「ら行」のうち、「ろ」から始まるオノマトペは、一つもない。語頭音として次に少ないのが、「わ」の20語、「や行」の26語、以下「ま行」の73語、「な行」の80語、「あ行」の86語となっている。

次に、4種の擬音語・擬態語辞典と1種の国語辞典、1種の学習辞典に重複して採録されているオノマトペがいくつぐらいあるか見ることとする<sup>6</sup>。まず、6種の辞典すべてに採録された語は以下の86語で、全採録語数1964語の約4.4%である。

あっさり	うっかり	かさかさ	かちかち	がっかり	からから
かんかん	きちんと	きっぱり	きらきら	ぎらぎら	ぐーぐー
ぐずぐず	ぐっすり	ぐるぐる	ぐんぐん	ごーごー	こっくり
こつこつ	こっそり	ころころ	ごろごろ	ざくざく	さっさと
さっぱり	さらさら	しくしく	しっかり	じゃぶじゃぶ	しょんぼり
すいすい	ずきずき	すごすご	すっかり	すやすや	すらすら
するする	ずんずん	せっせと	そっと	そっくり	そよそよ
そろそろ	ぞろぞろ	ちゃんと	ちょちよこ	ちよろちよろ	ちらちら
どっと	どやどや	とんとん	どんどん	にこにこ	のろのろ
ぱちぱち	はっと	ぱっと	はっきり	ぱったり	はらはら
ばらばら	ぴーぴー	ぴかぴか	ぴちぴち	ひっそり	ぴったり
ぶーぶー	ぶくぶく	ぶつぶつ	ぶらぶら	ぶるぶる	ふわふわ
ぶんぶん	ぶんぶん	ほっと	ぽっかり	ぽつぽつ	ぽんぽん
ぼんやり	まごまご	めちゃめちゃ	もぐもぐ	ゆっくり	ゆったり
よちよち	わいわい				

<sup>6</sup> 学習辞典のうち『基礎日本語学習辞典』は、オノマトペの採録語がわずか15語しかないため、ここでの分析の対象からは外し、他の6種の辞典について分析を行った。

採用語の一致がこれだけ低い数字になってしまうのは、学習辞典における採録語数がわずかに108語であることから考えると当然かもしれない。しかし、この86語は、学習辞典も含めて数種の辞書の見出し語に共通して採録されているということから、語彙として最も広く一般的に認められているオノマトペであると考えられる。

次に、学習辞典を除いた5種の辞書すべてに採録された語数を見ると443語で、全採録語数1964語の約22%である。さらに、4種の辞書に採録された282語を足すと、725語で全体の約37%となる。6種のうち3種以上の辞書に採録された語となると982語で、これで総数のちょうど半分となる。2種以上では1350語となるが、反対に1種の辞書にしか採録されていない語が613語ある。つまり、全体の約31%の語が、ただ1種の辞書にしか採録されていない語だということになる。これは、日本語オノマトペという語彙が、語基を元に様々なヴァリエーションを持ち、臨時語なども含めると、ある意味、無限に近いほどにその範囲を広げることができるということの一つの現れではないかと考えられる。

なお、ここで調査した各辞書に見出し語として採録された語の一覧を、巻末の【資料1】「辞書の見出し語に採録されているオノマトペ」として載せている。<sup>7</sup>

---

<sup>7</sup> ここで調査した2種の学習辞典のうち、『基礎日本語学習辞典』に採録された15語は、2. 1. 1の本文中に提示した。また『基本語用例辞典』は、基本語彙の先行研究として第5章2節で調査の対象としているため、その採録語も5. 2. 1で提示している。

## 2. 2 国語辞典と学習辞典におけるオノマトペの意味・用法の記述

2. 2節では、オノマトペの意味や用法が、一般の国語辞典と日本語学習辞典でどのように記述されているか、その記述は必要にして十分なものとなっているかを見ていくこととする。始めに2. 2. 1で、「しっかり」という語について、それぞれの辞典がどのように記述しているかを見てみる。次に、2. 2. 2で、意味や用法が類似しているため、学習者にとっても、また教師が説明や指導する際にも困難を覚えることの多い類義オノマトペ「きちんと」と「ちゃんと」について、その意味や用法の違いがどのように記述されているか、そこにどのような問題があるか考察する。

### 2. 2. 1 「しっかり」の意味・用法の記述

辞書におけるオノマトペの記述例として挙げるのは、数種の初級教科書にも取り上げられている「しっかり」である。<sup>8</sup>「しっかり」のように意味を複数持ち、さらにその意味が具体的な事物の状態や人の様子を表すのではなくかなり抽象的である語は、初級から中級前期の学習者にとって特に理解が困難であると思われる。

始めに、一般の国語辞典として2. 1節で調査の対象とした『学研 現代新国語辞典』の記述例を見る。次に、日本語学習辞典として調査の対象とした『外国人のための基本語用例辞典』と『基礎日本語学習辞典』における記述例を見る。(以下に引用する各辞書における意味の説明や用例はすべて原典通り。ただし、国語辞典における漢字表記は、常用漢字表にない、あるいはその音訓が認められていない字であるため省略している。また、学習辞典2種については、考察する際の便宜上、用例に番号を振っている。『基礎日本語学習辞典』における語の下線は筆者による。なお、『基礎日本語学習辞典』はすべて対訳が載っているが、ここでは見出し語の英訳の部分だけ載せている。また、原典にはふりがながつけられているが、ここでは省略している。)

#### (1) 『学研 現代新国語辞典』における記述

しっかり 《副・自サ》《副詞は「一と」の形も》

①堅固なようす。たしかなようす。「かばんを一と持つ」

<sup>8</sup> 初級教科書にどのようなオノマトペがどのような例文において見られるかについては、第3章3節で詳しく報告する。

- ②〔性質・行い・考え方などが〕堅実で信用できるようす。気丈なようす。「—した人物」
- ③気持ちがたしかで緊張するようす。気丈なようす。「—やれ」
- ④〔肉体的機能が〕丈夫なようす。「足は—している」
- ⑤《形動》商取引で、市場に活気があり、相場が高いようす。

さて、『学研 現代新国語辞典』における記述であるが、国語辞典というものが元々母語話者の使用を前提としているため、語義説明に用いられる語句も相当難しく、用例も文レベルではなく前後の文脈なしにごく短い文、または句で与えられていることがわかる。

語義①の「堅固なようす」「たしかなようす」の用例が「かばんをしっかりと持つ」となっているが、かばんを持つようすが「堅固である」「たしかである」というのはどういう状態を言うのであろうか。「堅固」という語を引いてみると、語義①として「しっかりしていて、簡単に動いたりくずれたりしないようす」とある。同様に「たしか」を引くと、語義②に「しっかりしていて信用できるようす」とある。つまり、堅固＝しっかり、たしか＝しっかり、ということになり、これがいわゆる辞書における「循環定義」である。

語義②は、「〔性質・行い・考え方などが〕堅実で信用できるようす」、語義③は、「気持ちがたしかで緊張するようす。気丈なようす」であり、用例はそれぞれ「しっかりした人物」「しっかりやれ」となっている。②の用例に、語義①の説明に用いられた「たしか」の語義として出てきた「信用」さらに「堅実」が、③にも「たしか」「気丈」という語が出てくる。すなわち「しっかりした人物」というのは、「堅実」で「信用」できる人、「しっかりする」というのは「気丈」にしている、ということになるが、読み手にとって、言い換えられたこれらの語が「しっかり」よりさらに難しい語である可能性も排除できない。また、具体的にどのような場面と状況において、誰に対して何のために「しっかりした人物」とか「しっかりしろ」と言うのか、という語の実際の使われ方がこれでは何も示されていない。語の意味を、他の語に言い換えることで伝えることがいかに難しいことであるか、改めて感じさせられる。

次に、外国人学習者のために編纂された2種の学習辞典における記述を見る。

## (2) 『外国人のための基本語用例辞典』における「しっかり」の記述

### しっかり (副詞)

- 1 物事がかたく強いようす。／「しっかりと」の形でも使う。

- (1) あぶないからしっかりわたしにつかまっていなさい。
- (2) 台風(たいふう)が来るそうだから、とばされないようにしっかりとしぼりつけてください。
- (3) このかさのほねはしっかりしているから、まだ一度もおれない。
- (4) 何事でも基礎(きそ)がしっかりしていないとだめになる。

2 人の性質や考え方が、まちがいなく、信用のできるようす。

- (5) あの人はしっかりしている人だ。
- (6) あの学生はしっかりした意見をのべる。
- (7) もっとしっかりしないとこまる。
- (8) あのおくさんはしっかり者だ。

3 気持ちをひきしめ、ゆだんのないようす。

- (9) しっかり勉強してください。
- (10) あすは試験だね。しっかりがんばって来い。
- (11) しっかりしなさい。そんなことであきらめてはいけません。
- (12) きずはあさい。しっかりしろ。

(3) 『基礎日本語学習辞典』における「しっかり」の記述

**しっかり**【副、～と、～する】 **strong, solid, firm; be strong-minded, be stouthearted; reliable, sound**

① [堅固な様子、強い様子]

- (13) この箱はずいぶんしっかりしていますね。
- (14) しっかりと持っていないと、落としますよ。

② [気をひきしめる様子]

- (15) 入学試験が近いですから、しっかり勉強してください。
- (16) このくらいの傷はなんでもありません。しっかりしなさい。

③ [人の性質や考え方が間違いなく信用できる様子]

(17) 田中さんの奥さんはとてもしっかりした人です。

まず、日本語学習辞典である『外国人のための 基本語用例辞典』であるが、対象者が中級前期までの学習者ということもあり、媒介語を使用することなく平易な日本語での説明がされている。しかし、意味①の「物事がかたく強いようす」という説明で、果たしてどれほどこの語の意味が伝わるだろうか。もちろんそれを補う意味で例文があるわけだが、例文(1)の「あぶないからしっかりわたしにつかまっていなさい」というのが、いったいどのような状況なのかこれだけでは分かりにくいと思われる。例えば、「小さな船だから、波が強い時は大きくゆれます」というような「あぶない」ことの前提となる文脈が与えられれば、この例文における「しっかり」の意味もよりはっきりするのではないだろうか。

その点、例文(2)の「台風(たいふう)が来るそうだから、とばされないようにしっかりとしばりつけてください」では、台風が来るという状況があるものの、「何が」とばされないように「どこに」しばりつける必要があるのか、もう少し具体性がほしいところである。同様に、例文(4)「何事でも基礎(きそ)がしっかりしていないとだめになる」も、たしかにその通りではあるが、何事といっても例えばどのような事なのか、説明がほしいところである。

意味②では、「人の性質や考え方が、まちがいがなく、信用のできるようす」という説明があり、さらに「あの人はしっかりしている人だ」とか「もっとしっかりしないとこまる」という例文が出されているが、具体的にどのような人なのか、どうしたらしっかりすることができるのか、理解することはなかなか難しいと思われる。

それに比べて、意味③の例文(10)「あすは試験だね。しっかりがんばって来い」というのは、学習者には身近な問題としてわかりやすいかもしれない。しかし、同じ意味③の例文(11)「しっかりしなさい。そんなことであきらめてはいけません」では、「そんなこと」で指し示される状況が具体的でないので、やはりわかりにくいと思われる。さらに、例文(12)「きずはあさい。しっかりしろ」は、この発話がなされる背景が戦時中のできごとと想像され、たとえ日本語母語話者であっても、若い世代にはもはや通じない言い回しではないかと思われる。また、意味説明の「気持ちをひきしめ、ゆだんのないようす」という例文の「ひきしめる」「ゆだん」は、語彙レベルとして中級程度の学習者にはやや高度ではないか考える。

次に、『基礎日本語学習辞典』であるが、基本的に和英辞典の形式をとっているため、意

味が一つのものには日本語の説明がなく、訳語と例文およびその英訳が記されている。日本語で意味の説明があるものは、意味が複数ある語に限られる。意味の説明に用いられた言葉は『基本語用例辞典』とほとんど同じであるが、学習者は、日本語による意味説明と例文、それに対応する英語訳を見ることで、かなり正確にその意味をつかむことができるかと思われる。ただ、例文としては、『基本語用例辞典』と状況はほぼ同じである。

意味①の例文(13)「箱がしっかりしている」というのも、どんな箱であれば「しっかりしている」というのか、例えば、とても重いものを入れても絶対こわれぬ、というような文脈があるといいのではないだろうか。また、例文(14)の「しっかり持っていないと、落としますよ」というのも、どんなものを持っているかを示すだけで、ずいぶんわかりやすくなるのではないかと思う。意味②では、例文(15)「入学試験が近いですから、しっかり勉強してください」が、具体的でわかりやすい例となっている。例文(16)も「このくらいの傷はなんでもありません。しっかりしなさい」では、「このくらいの傷」がどの程度の傷かわからないとしても、「なんでもありません」というところから状況は推測できそうである。ただ、意味③の例(17)の「田中さんの奥さんはとてもしっかりした人です」というのは、やはりこれだけでは、何も説明できているとはいいがたい。この例文の英語訳を見ると、

Mr. Tanaka's wife is a person of firm character [has her feet firmly on the ground].

となっている。英語母語話者はこの訳文でわかるのだろうか。また、興味深いのは、『基本語用例辞典』にも、「あのおくさんはしっかり者だ」という例が挙げられている点である。

<sup>9</sup> 日本では、<奥さんはしっかりしている>という固定観念があるのだろうか、あるいは、そうあってほしいという願望がこめられているのだろうか。奥さんではなく、「あのご主人はしっかり者だ」という例文はあまり見たことがないとするれば、「しっかりした奥さん」という表現には、いわゆる<内助の功>という伝統的な価値観が含まれていると言えるのだろう。

最後に、3種の辞書における「しっかり」の記述について、もう一つ気になる点を述べておく。それは、「しっかり」の意味・用法として、次のような例がどの辞書にも見当たらないことである。(以下の例文は、筆者による作例である。)

(18)朝ごはんをしっかり食べないと、お昼前におなかがすいてしまうよ。

---

<sup>9</sup> もちろん、辞書の執筆者も、意味や用例の記述を行う際、他の同類の辞書を参考にしているということが考えられる。よって、複数の辞書に似たような用例が載っていることは、不思議なことではない。

(19)外はとても寒いから、しっかり着込んで出かけよう。

(20)ルールをしっかり覚えてからゲームを始めてください。

これらの例では、「しっかり」の意味は、＜何らかの行動を、それが足りないために困ることがないように十分に行う＞というような意味ではないかと考える。つまり、(18)では、＜朝、十分な量を食べておかないと、昼食の時間の前におなかがすいてしまう＞ため、(19)では、＜暖かい洋服をたくさん来て出かけないと、外に出たとき寒くて風邪を引いてしまうかもしれない＞ため、(20)では、＜ルールを完全に覚えてからゲームを始めないと、ゲームがうまく進行できなかつたり、つまらなかつたりする＞ため、それぞれの行為（食べる・着込む・覚える）を十分に（＝しっかり）行うことが必要だ、ということである。ところが、国語辞典における意味記述の①堅固、たしか、②堅実、信用できる、気丈、③気持ちのたしかで緊張する、④丈夫、のどれもこの意味を説明しているようには思えない。学習辞典においても同様である。筆者自身は、「しっかり」を、(18)～(20)で示したような意味で日常的に用いているが、それは一般的な用法ではないということなのだろうか。あるいは、「しっかり」という語に、最近見られるようになった新しい用法なのだろうか。「しっかり」のように、日常的に用いていると思われる語でも、その意味や用法をすべて把握することは、母語話者にとってもなかなか困難であるということが改めて感じられる。

## 2. 2. 2 「きちんと」と「ちゃんと」の意味・用法の記述

ここでは、類義関係にある「きちんと」と「ちゃんと」の意味・用法の記述を見てみる。この2語は、「しっかり」同様、初級教科書にも出現している語であり、また日常的にもよく用いられると考えられる語である。しかし、この二語の意味の違いや使い分けは、外国人学習者には難しいものの一つであると考えられる。

始めに、『学研 現代新国語辞典』における「きちんと」と「ちゃんと」の記述を見る。(以下に引用する各辞書における意味の説明や用例の記述方法は、2. 2. 1に準じる。)

### (1)『学研 現代新国語辞典』における「きちんと」と「ちゃんと」の記述

#### きちんと 《副》

①整っていて、乱れないようす。「部屋は——かたづいている」

②正確で規則正しいようす。「会計は——している」

**類語** ⇒ちゃんと

ちゃんと《副・自サ》

①几帳面に（まちがいなく）するようす。「仕事だけは——する」

**類語** ⇒きちんと。そつなく。遺漏なく。几帳面。規則的。

②すじがとおっているようす。「——した話」

③身分・身元などがたしかであるようす。「——した会社の社員」

**類語** ⇒確(しか)と。確(かく)たる。

④態度がしっかりしているようす。「——した生活」

**類語** ⇒しゃんと

⑤〔形・状態などが〕ととのっているようす。「——つくられた書類」

**類語** ⇒整然。立派。

さて、上記の記述を見て、「きちんと」と「ちゃんと」の意味や用法を正しく理解し、ちゃんと（きちんと）使い分けられるだろうか。この2語の使い分けが難しいことは、それぞれの語の傍線の部分を、もう一方の語で置き換えてもほぼ同じ意味が伝えられる場合が多く、また多少ずれがあったとしても、文としては適格であることから分かる。では、その違いはどのように理解すればよいのだろうか。そして、教師の側も自らの使用言語としては正しく理解し使い分けることができたとして、学習者からその意味や用法の違いを問われたときに、ちゃんと（きちんと）説明ができるだろうか。実は、筆者自身、ある中級教材にこの2つの語が出てきて、学習者にその違いを質問されたのだが、的確に答えることができなかつたという経験がある。

では、学習辞典では、この2語についてどのように説明されているだろうか。2種の学習辞典における記述を見てみる。

(2)『外国人のための基本語用例辞典』における「きちんと」と「ちゃんと」の記述

きちんと（副詞）

正しくて、みだれていないようす。

(1)へやをきちんとかたづけてください。

- (2) いつもきちんとしたふくそうをしている。
- (3) きちんとすわっていたので、足がいたくなりました。
- (4) くつをぬいたら、きちんとそろえておきなさい。
- (5) きちんとたたむ。
- (6) あの人のとけいはいつもきちんと合っている。
- (7) やくそくの時間にきちんと来てください。
- (8) お金をきげんまでにきちんとはらいます。
- (9) 村田さんはきちんと仕事をする人です。
- (10) 学校のきそくをきちんとまもりましょう。
- (11) へや代は毎月きちんとはらっている。

／「そのたびにまちががなく」というとき「きちんと」とも言う。／

#### ちゃんと（副詞）

- 1 くずれた状態ではなく、きれいになっているようす。
- (12) つくえの上はいつもちゃんとかたづけております。
- (13) 本は読んでしまったら、ちゃんと本ばこの中にしまっておきなさい。
- (14) 一時間もちゃんとすわっているのは難しい。
- (15) お客さんに会う前に、ふくそうがちゃんとなっているか、もう一度調べた。
- 2 すっかり。はっきり。かんぜんに。
- (16) わたしはじぶんの悪い点はちゃんと知っている。
- (17) あの人がそのへやの中にはいつ行くのをわたしはちゃんとこの目で見た。
- (18) 石田さんからおかりしたお金は、やくそくどおりちゃんと5日後にお返ししました。

(3) 『基礎日本語学習辞典』における「きちんと」と「ちゃんと」の記述

#### きちんと【副】 exactly; neatly

① [正確なようす]

- (19) 上田さんは、約束通りきちんと3時に来ました。

② [整っているようす]

(20) 部屋の中をきちんと整理してください。

(21) 田中さんはいつもきちんとしたかっこうをしています。

⇒ちゃんと chanto

### ちゃんと【副、～する】 **properly, exactly; perfectly, duly**

#### ① [きちんと、きれいに]

(22) 上田さんの部屋はいつもちゃんとかたづけてあります。

(23) 田中さんはいつもちゃんとネクタイを締めています。

#### ② [すっかり、完全に]

(24) 出発の用意はちゃんとできています。

(25) 部屋代は、毎月ちゃんと払っています。

⇒きちんと kichinto

さて、上記2点の辞書における記述について考察する前に、この類義関係にある2語について、中道（1991）が分析し、以下のように記述しているので引用する。<sup>10</sup>

#### ①きちんと

1. 外観が整っていることを表す用法。

1. 1. 副詞としての用法 「机の上はきちんと片付けておきなさい」

1. 2. 動詞としての用法 「服装がきちんとしている」

2. やり方が適切であることを表す用法。

2. 1. 副詞としての用法 「冷蔵庫のドアはきちんとしめておく」

2. 2. 動詞としての用法 「きちんとした挨拶もできない」

3. 規則的に、または期限をまもって行われることを表す用法。

3. 1. 副詞としての用法 「借りた金を毎月きちんと返済した」

3. 2. 「きちんと」の形の用法 「毎日のノルマをきちんとこなす」

#### ②ちゃんと

---

<sup>10</sup> ここでは、中道（1991）から抜粋して引用しているが、用例や記述法などは、筆者が一部書き換えている。

1. ものごとのあり方に関する用法。

1. 1. 副詞として用いて、やり方が適切である、または起こり方が好ましいことを表す用法 「虫歯の治療をちゃんとする」「ちゃんと遅れずに着く」

1. 2. 動詞として用いて、質がよいことを表す用法。

「早くちゃんとした病院で診てもらったほうがいい」

2. 副詞として用いて、ものごとが確かにあることを表す用法。

「ちゃんと着いたんだから、2、3日遅れたぐらいいいじゃないか」

2. 1. そのことに対する驚きやあきれの気持ちを含む用法。

「もう残りが無いから配れないと言いながら、自分の分はちゃんととってある」

以上の用例から、「きちんと」の最も基本的な意味は、1. のように「外観が整っていること」である。そこから2. のように「整った状態を作り出すやり方」であることを表す用法が派生し、その中に、「きちんと閉める」つまり「閉めた結果きちんとした状態になる」という「結果の副詞」的な用法が含まれてくる。2. 2. の動詞用法も、「整った状態であること」や「整った状態にする性質があること」を表すものと考えることができる。そして、3. は比喩的な用法で、「時間の流れの上に規則的に配列されること」を表している。

一方、「ちゃんと」には意味から分類して二つ、形を考慮すると三つの用法があると考えられる。1. 1. の用法では、動作の行われ方、作用の起こり方が適切、または好ましいことを表す。ここでは、望まれるレベルを十分に達成することを表す例がかなりある。1. 2. では、動詞用法とはいいながら、状態を表す用法がほとんどで、1. 1. と同様、質が良い、それも十分な水準であることを表す。2. は、「遅れたけれどちゃんと着いた」のように、「着いたか着かないかを問題にするならば、ちゃんと着いた」という、ものごとの存在・不存在を問題にする用法である。発音される際のプロミネンスの位置を考慮に入れば、1. 1. と2. が別の用法であることがより明らかになる。(▽はプロミネンスの位置を示す。)

1. 1. 虫歯の治療は ▽ちゃんと しました。

2. 虫歯の治療は ちゃんと ▽しました。

つまり、2. では、治療のしかたではなく、治療したか否かを述べているのである。そして、「きちんと」と比較したとき、「ちゃんと」の2. に当たる用法が「きちんと」にはないと考えられる。このような例も含めて、「きちんと」の用例のほとんどは、「ちゃんと」

で置き換えてもほとんど表現内容は変わらない。逆に、「ちゃんと」の用例を「きちんと」で置き換えると、1. 1. のうち、作用の起こり方に関する用例、1. 2. のうち「ちゃんとした病院」など、外観を問題にできない場合の例、そして2. のうちのかなりのものが置き換えられないことがわかる。

全体として、「ちゃんと」はものごとの状態が好ましく良いものであることを表し、「きちんと」はその中でも、外見上の状態にかかわるものを表すのが基本である、との仮説を得ることができる、ということである。

さて、以上の中道の分析を、学習辞典における意味と用例の記述に照らして考えてみる。まず、『基本語用例辞典』では、易しい語彙や文型を使用し、中級レベルまでの学習者にもわかりやすい用例が11も挙げられていることで、学習者にとって十分な情報が与えられているように思われる。しかし、「きちんと」の語義を「正しくて、みだれていないようす」と一つに集約させている点に多少問題があると言える。また、副詞としての用例が11例のうち10例を占めており、動詞用法から状態を表す形容動詞的用法となっている「きちんとした～」の用例が一つしかない。さらに、その用例も他の副詞用法の用例の間にはさまれているため、学習者には、「きちんと」の統語的な情報が伝わらない可能性があると思われる。一方、「ちゃんと」については、語義を二つに分けている。そして、中道が「ちゃんと」の2. の用法、すなわち「ものごとの存在・不存在」を問題にする用法は、語義の2「すっかり。はっきり。かんぜんに」で表されていると言える。

次に、『基礎日本語学習辞典』では、「きちんと」の意味を「正確なようす」「整っているようす」と二つに分けて提示している。ただ、中道の分析における2. 「やり方が適切である」という意味は、「正確」「整っている」では表せていないように思う。また、紙幅の関係もあるとは思いますが、用例ももう1例ずつぐらい挙げられているとよりわかりやすいのではないだろうか。さて、「ちゃんと」では、語義の①に「きちんと、きれいに」という記述があり、「きちんと」と同じ意味であることが示されている。しかし、語義の②のほうは、「すっかり、完全に」となっており、中道のいう「ちゃんと」の2. の用法であることがわかる。そして、用例(24)は「きちんと」では置き換えにくい例であると思われるが、語義②の用例の下に「⇒きちんと」と表示されているため、学習者が、「ちゃんと」の用例をどれも「きちんと」で置き換えられるように思ってしまう可能性も排除できない。

「きちんと」と「ちゃんと」のように、どちらも基本的な語として類義関係にあり、そ

の意味や用法の重なる部分と置き換えができない部分が複雑にからみあっている語は、その意味や用法を学習することも指導することも、非常に困難であることがわかる。

以上、国語辞典および日本語学習辞典におけるオノマトペの意味・用法の記述について見てきた。ここでの調査と考察を、本論文第6章で行う「基本オノマトペ」のリソース化において生かしたいと考える。

## 2. 3 擬音語・擬態語辞典における多義オノマトペの記述

ここでは、2. 1で調査した擬音語・擬態語辞典の中から、代表的な2点を取り上げ、学習者にとって特に習得が困難であると考えられる多義オノマトペ<sup>11</sup>の意味や用法がどのように記述されているか見てみる。例として挙げる多義オノマトペは、「ごろごろ」である。「ごろごろ」は、日本語オノマトペの中で最も多くの意味や用法を持つものの一つである。

始めに2. 3. 1で、『正しい意味と用法がすぐわかる 擬音語擬態語使い方辞典』における「ごろごろ」の記述について、次に2. 3. 2で『現代擬音語擬態語用法辞典』における記述について見る。

### 2. 3. 1 『擬音語擬態語使い方辞典』の場合

この辞典では、「ごろごろ」の項に、以下のように5つの意味とその用法、例文があげられている。(意味の記述、用法、例文は、すべて原典通りである。)

**意味1** 雷が鳴る音。また、雷が鳴るような音。

**【用法】** 音

<雷・物・腹>が・・・(と) 鳴る

<猫>が<のど>を・・・(と) 鳴らす

**【例文】**

- 遠雷がごろごろと鳴りながらだんだん近づいてくるようだ。
- ボウリング場のそばまでいくと、もうごろごろという音が車のとどろきのように聞こえてくる。
- 腹具合を悪くして、腹が一日中ごろごろ鳴っていた。
- 私のベッドにもぐり込んできて、猫はうれしそうにごろごろとのどを鳴らした。

**意味2** かなり重量のある物体や肉体が連続してころがるようす。

**【用法】** 態

<sup>11</sup> 多義オノマトペの定義については、第4章6節「オノマトペの認知言語学的観点からの教育」を参照のこと。

<物・肉体>が・・・(と)ころがる、落ちる/する

【例文】

- ダンボール箱を傾けると、みごとなジャガイモが**ごろごろ**ころがり出た。
- 土砂崩れで、子供の頭ほどもある岩石が**ごろごろ**ころがり落ちてきたのであわててバックしたんです。
- 子供たちは砂山から**ごろごろ**と転げ落ちる遊びに余念がない。
- アザラシは岩の上に集まって**ごろごろ**と日光浴。
- 登山者が下山したあとには、ジュースやビールのあき缶が**ごろごろ**していた。

**意味3** 働かないで時を過ごすようす。何もしないで時を過ごすようす。

【用法】態

<人>が・・・(と)暮らす、過ごす/する

【例文】

- 失職していなかの親元に帰り、1年ほど**ごろごろ**と暮らしていた。
- あの事務所には、やくざふうの男が始終3、4人は**ごろごろ**している。
- 家で**ごろごろ**していたってつまらないから、旅行にでも出かけようと思う。

**意味4** たくさんありすぎて珍しくも貴重でもないようす。

【用法】態

<物・人>が・・・している、<ある>

【例文】

- あの程度の美人なら、東京じゃ**ごろごろ**いるよ。
- 腐らせて捨てるほど**ごろごろ**ある果物が、あっちでは高い値段で売れる。
- 1枚何万円という皿小鉢が台所に**ごろごろ**しているんだから取り扱いに気をつけよう。

**意味5** かたまりや異物がいり込んでいて違和感を感じるようす。

【用法】態

<目・寝具・袋>が・・・する

<突起>が・・・と当たる

【例文】

- ごみがいって目がごろごろする。
- ひどい宿屋で、綿がよってしまっでごろごろするふとんに寝かされた。
- リュックの中の、背中にごろごろ当たるものは何かしら？

2. 3. 2 『現代擬音語擬態語用法辞典』の場合

次に、もう一つ別の擬音語・擬態語辞典の例を見してみる。『現代擬音語擬態語用法辞典』では、多義オノマトペ「ごろごろ」に4つの意義素があるとして、それらを導く用例として以下のようなものを挙げている。(以下の用例は、すべて原典に記載されている通りである。)

(1) 比較的大きくて重いかたまりが連続して立体的に回転する様子を表す。

- ①丸太をごろごろ転がして運ぶ。
- ②箱がこわれてリンゴがごろごろと転がり出た。
- ③子供たちは床をごろごろと転がり回った。
- ④ちょっと掘ると大きなイモがごろごろ取れる。
- ⑤アザラシが岩場でごろごろと日光浴をしている。
- ⑥洪水が引いたあとごろごろの岩があちこちに置き去りにされている。
- ⑦その道は石ころだらけのごろごろした道だ。
- ⑧今日はだるくて一日中ごろごろしていた。
- ⑨若い者が家でごろごろしてちゃいけないね。

(2) 重いものを転がすときに摩擦する音を表す。

- ①ごろごろと石臼をひいてソバを粉にする。
- ②遠くで雷がゴロゴロと鳴っている。
- ③猫は目を細めてごろごろのどを鳴らした。
- ④冷たい牛乳を飲むと腹がごろごろする。
- ⑤(子供に) ほらゴロゴロが来るよ。

(3) 異物がいくつも当たって不快である様子を表す。

①コンタクトレンズにごみが入ってごろごろする。

②縫い目がごろごろして痛い。

③リュックの中身が背中にごろごろ当たる。

(4) 同類の物が多数存在する様子を表す。

①工房には傑作がごろごろ転がっていた。

②あの程度の小説は世の中にごろごろあるね。

③かわいいアイドルだって、世の中掃いて捨てるほどごろごろいるじゃないか。

さてここで、用例(1)の①～③から、「比較的大きくて重いかたまりが連続して立体的に回転する様子」という意義素が導かれるというのは明らかである。しかし、(1)の④と⑤の「イモが取れる」「アザラシが日光浴する」ときの様相は、「立体的に回転する」という説明からは少し離れていると思われる。同様に、『擬音語擬態語使い方辞典』においても、<かなり重量のある物体や肉体が連続してころがるようす>の例として「アザラシが日光浴する」を挙げているが、やはりこの例においても、アザラシは連続してころがっているわけではないと考えられる。また、(1)の⑥と⑦においては、今「回転している」のではなく、ある物体が「回転した」のち、そこに放置された結果の状態を表していると言える。さらに(1)の⑧や⑨になると、そこには抽象的・心理的な意味要素が加えられているわけで、(1)の元の意義素とはかなりの隔たりを感じざるを得ない。実際、用例の①から⑨においては、多義的意味の派生・拡張が連続的に見られると思われるのだが、そのことが、ここに挙げられている用例とその解説だけでは、十分に伝えられているとは言えない。

『擬音語擬態語使い方辞典』でも、同じ「ごろごろ」の意味を5つに分類しているわけだが、それらにおいても、多義的意味の派生・拡張が連続的であり、かつ互いに関連性があるという様子は見てとれない。このように、多義語において、複数の意味・用法が連続的につながっているとすれば、始めにいくつかの意味に分類して各々に該当する用例を挙げるにしても、多くの用例から帰納的に意義素を導いて分類するにしても、それらの分類によって多義オノマトペの意味の全容を示すには限界があるように感じられる。なお、多義オノマトペの意味・用法については、第4章6節「オノマトペの認知言語学的観点からの教育」のところで改めて述べることにする。